

148
301



074373-000-4

特46-174

ちゃんちゃん征伐ちうたづくし

中丸 貞蔵 / 刊

M27

CEI-1625



○三下りの色がある
 ○敵が居る承知を向ふ斥候も踏出すから
 ○船までも勝つて其はにやならぬぞへ
 ○敵の香は下着を除き天津日さしの添ふ
 ○疵を受けは用片の種の脂を吹出さ芥子
 ○坊主
 ○紳士紳商心に恥し車夫でも義献の金を
 出す
 ○敵の彈丸なに負ものそ切て彼等の首を
 負ふ

サア、皆さん此れは當時天下に名高き大家の作を集めたるものなり。元是れ滑稽の小分子に過ぎずと雖も。所謂小粒の山椒もヒリ、として。辛き處を味ふ人あらば。或ひは諸君の勇氣を鼓するに足らんか。讀人必ずしも小冊子とて侮る勿れ

編者識るす



○文句入り都々一

○聞て下さい日本のおがた

竹本 お話し申すも耻かしながらもど私

天津うまれ役目によつて舟のす

まおこの度上の仰せにより乗出し

たる豊島で戦かふまさい情ない未

熟な手なみはほんどにつらや敵を

防がんと手だてさへ思ふまかせぬ

時の場合君たちに生どられ

「こんな憂目をみるわいな

○李鴻章ともいれるゝものが

久松 この不始末はなよことぞどうから

斯と知たゆへ内へて忠告し帝の

お耳へ入れまいと辛抱したがもう

かなわぬ情ないこととしてくれた

がら甲斐なき小筒に打ちかけられ「海へ

逃れば敵方の傍へも寄れぬ砲丸づくめ避

る真中を打れど船先を向けて敵への

味方を見捨漕ぐ船も通れて聞けば陸兵も

あーたの芥子と散るかなしさ「旗も火薬

も思ひすて何處でめぐり大砲の烟りをあ

どに遠路や身の痛さへ應へなく怖しく

に氣を揉みちらし程も無いのに生捕の中

にさまよふ口惜さは何時の世いかなる報

おにて重ねくの不覺の數くあわれみ

給へどバアくの聲を放ちて嘆さける「

扱く白痴な話何國も開けて居る世界に

氣の弱い男だナア

○日清事件數へ唄

一ツトヤー 人々憎むい支那の奴く

「支那の大臣さわざだす

○泣顔日記 佐世保宿屋の段

「朝顔日記宿屋の段」の替歌

○泣き言ばなしも時の一興話して聞せ何

どく「ハイ宜ふ問ふて下さりますお言

葉にすがりお明し申さるも耻かしながら元

豚尾の中國生れ賄賂出して兵士の身の上

此年不時の鹿島立に困り果てたる國人と

「ためらふ間さへ夏の夜の短い命と知ら

ない別れこゝる急る、旅路さへ思ふに任

せぬ國の弱み「あやふやに誘われ支那

の空をあどにて海を越したる憂を思ひ

「敵勢遅しの伏兵にやましく兵は有りな

李鴻章との名ばかりでく

實 なさけない

海にも陸にも大敗でく

今の取つく島もなしく

實 あわれさま

皆く入込む日本兵く

錦の御旗のヒラくどく

實 あざやかな

止せば能のに豚尾漢く

何時も拙ない謀りおどく

實 キビのよな

何時もながらに敗軍く

はたや鐵砲ふん捕られく

實 意氣地ない

無頼の輩のあつめ兵く

幾方ありとて役立たずく

實 やくかいな

七ツトヤ

中にたよりの葉志超く

秋の木の葉と消ゆ行てく

實 おかしさよ

八ツトヤ

やまと魂ひ胸に据ゑく

一步も退かぬ日本へい

實 いちぢよよ

九ツトヤ

今度平壤乗ッ取ッてく

北へくどすみ行く

實 うれしさよ

十ツトヤ

トウく北京も圍てく

降参するもの近い内く

實 肺甲斐なき

○追ひ勝つ 「老松」の變調

ならばもしや取られた。其時ほられこそ
李鴻章がソレ通る

○「梅の春」

○から錦、さめて野山の秋風蕭々、「うつ
か北京へ朝駈けの彼も是もと撰み討ち」
いさ首とらん李鴻章「手筈宵から談じ置
き」ちから攻めまるせり合によい敵兵を
粉微塵、天津濟で陣押しの「旗の赤さひ
のいさぎよく、此地ばかりを眼にかけて
今日開戦と言ふなら、腕をかぎりよ城攻
めど、各自にかたき意氣込は、ほんよ鬼
ども組むばかり、時は今ぞと砲けふり、
消る真中を突貫ふて、難なく勝を得たり
けり。千秋樂にの民をなで萬歳樂には支
那地を取る。國のにざいひ忽ちに弓矢と

○ろもく、我れの手強きと萬國に勝れ。

十八省の奴原千人に一人りが向ひ古今の
勝を見ず。清は諸兵を驅り集め。平壤に
立て籠り。大軍頻りに寄せしかば。味方
之を破らんと策を定めて進撃し。兎も角
たちまち大砲を放ち枝を断ち葉を枯らさ
んど。彼の面此の面を塞ぎて。其敵を漏
さいりしかば。味方大分敵兵を殺し擒に
したりしより。勝つを大勇と申すとかや
斯様よ手強き我が兵に。敵對ふ奴の弱
をば。急に平らげ御馳走は。豫ねて滿州
奉天に數へ盡ぬ金銀珠玉。どうくく
と寶庫の内分捕る人こそ愉快なれ

○梅ヶ枝

日本のますらをが。進んで旅順口を取る

る身も時を得て目出度く討平らげ。
つきせぬ光り日の本と。榮へ時めく旭影
幾度の勝や祝ふらん。千歳の春やうだ
らん。

○紀伊の國

○支那の國ハ海洋島の沖合は。戦ひたる
のは日清艦。支那艦十四艘大合戦。扱て
大砲に中りては。たまるものかや沈没し
何れも戦ひ負どうぞ。勝にハ剛氣な日本
船。心も赤城の艦長が。指揮を勇まし。
討死は。覺悟で眞先、眞黒な煙砲の中を
ば進まれて。功をなしたる日本魂。

○越後國

豚尾の國の意久地なし。國を出る時や旗
を建て平壤破れてでんぐりかへつて義州

へ逃げまどる。士卒泪で嗷吹吹く

○海晏寺

○ア、見やしやんせ支那の兵。まよ上幾万あるとて。恐れなそへ。エ、わが國は。

○小町おもひば

○軍おもひば我が手もなる野津の中將のはかりおと九十九りでもゆかんせう仰ふせに及ばぬそりやそうでなうてかいな砲臺に玉を打たかへ其方やそこらで腰がぬけエ、馬鹿じやエ、

○權兵衛が種蒔

○日兵が向へば清兵が逃出す三度よ一度も勝つこと出来ない豚尾奴くくくヤ

○我が物

敵の船コチャエーく

○鐵壁瞬くやぶられて青くなり全軍忽ち總崩れコチャ白旗は櫓にひらひらコチャエーく

○戰雲漠々八道に満れども城下の盟は遠からずコチャ奮て進めよ旭日軍コチャエーく

○豈に天兵に勝つべきや手負隊仰げば北京の城上にコチャ豊かにかいやく日章旗コチャエーく

○琉球節

○早く北京を日本に取らば通ふて開化にして見たいハアシタリヤヨメく眞にヨクくシタガンく

●るんかいなぶし

○馬鹿者と思へば哀れ支那の兵、國の廣いを鼻に懸け、いざ攻め行けば豚の身の戦ひ鈍く智畧なく、負けては慕る逃げ心、實に弱いぢやないかいな

○淺くとも

○小さくとも強き日本の勝戦、飛た數多の敵兵を、殺して見たり珠數つなぎ、國の譽れぢやないかいな

○忍ぶ懸路

○支那の兵上は扱て果敢なさよ何ん度負けても意氣地なく汚す名前も惜しまずよ其影かくす武士の耻

○お江戸日本の替歌

○霹靂響きて天をつき地をやぶり艦隊揃へてコレワイサノサコチャ見るく沈む

○光る日本の恵をば、受けて朝鮮内閣の。まぼんだ花を咲せんと。又出た大院君かいな。

○成歡攻るるの時に。軍功一の松崎氏。多の兵を指揮しつゝ。渡る安城川かいな

○敵を目掛けて飽までも。進む日本の武士は。外に類なき大和魂。腕を振ふて來んかいな

○向ふ處に敵なしと。勢ひ破竹の日本兵。恐れる敵地の兵隊へ。皆な弱虫連かいな。

○守る所はみな負て。又と戦ふ意地さへも。なみだと共に落ちてゆく。なんたる弱虫連かいな

○負けて黄海々戦の。後ハ大砲の音沙汰も。波路遙かに旅順へと。逃る支那の艦

七

い
 ○攻る日本の勇猛は。他國にたぐひも嵐
 吹く秋の木の葉のちりくりに。逃るはち
 やんく連かいた。
 ○命おしみの支那兵は。出るかと思や直
 逃る。軍器兵糧の置去りは。是もお負の
 損かいた。
 ○國の爲に身命も投打つ。日本の忠勇
 者。渡る朝鮮支那の國。乗ッ取る北京の
 城かいた。
 ○威海旅順の砲臺を。聽て難なく打破り
 進んで攻る海軍が。乗取る渤海湾かいた。
 ○支那の軍艦二三艘。居ると聞たる威海
 衛。向へば直に何處へやら。逃たへ渤海
 湾かいた。

○めつちやふし
 ○支那の人間は餘ッぽど耻知らぬ奴隷で
 も構ハぬチウテ欲張るめつちや
 ○逃たちやんく坊主は餘ッぽど可愛さ
 う兵糧取らせて堪らんチウテ渴へ死ぬめ
 つちや
 ○支那のちやんく坊主は餘ッぽど間拔
 だヨ一窓の毛が邪魔だアチウテ巻つけ
 るめつちや
 ○逃出したちやんく坊主は餘ッぽど面
 白い腹が蔽ては駈れぬチウテ粥を啜るめ
 つちや
 ○支那の分捕品は餘ッぽど數がある是は
 勝利の印チウテ陳列するめつちや
 ○牙山の分捕品は餘ッぽど澤山ある同胞
 姉妹よみせたいチウテ九段に列んでる